

荒尾のタベ

服部, 英雄
くまもと文学・歴史館 : 館長

<https://hdl.handle.net/2324/4149936>

出版情報 : 三川坑を語り伝える, 2020-11-09. 三川坑に慰霊碑を建てる会
バージョン :
権利関係 :



荒尾の夕べ

くまもと文学・歴史館長 服部英雄

わたしは熊本県庁勤務の沖課長とは山友達で、彼からよく父上のお話を聞いていた。父上とは三池CO（一酸化中毒被害者）裁判原告団団長・沖克太郎氏である。2020年1月19日、職場の仲間と荒尾のお宅を訪問した。室内には「総資本対総労働」、三池闘争を彷彿とさせる旗や写真でいっぱいだった。鈴木茂三郎、大内兵衛の色紙も飾ってあった。ホッパーを囲む大群衆の周りに溝があって、警官隊との対決となったら灯油を撒く作戦だったと教えてもらった。

大牟田市の石炭産業科学館に、『西日本新聞』昭和38年11月10日朝刊が展示されている。三池三川坑爆発事故・翌朝の報道である。見出しに「死者171名」「まだ531人が不明」とある。10日午前1時現在、死亡者氏名に34名の名前が載っていて、そのなかに沖勝太郎（克太郎の誤字）の名前があった。苗字の下が某となっている人もいて、混乱を極めていた。一酸化炭素が充満した毒空気の中で、ほんのわずかな濃度の差・空気層の違いがあって、生か死か、あるいは重度障害者になるか、ならないかの境目になっていた。沖さんは仮死状態になってはいたが、死んではいなかった。死亡と誤認しただれかが、沖さんの体を横にし、頭の上にヘルメットを置いた。生きていると分かった時、周りの人はさぞかしおどろき、喜んだことだろう。トラックで多数の遺体と一緒に搬出されたとのことである。

高額の奨学金をもらって三井鉱山学校を卒業した。鉱山の柱となる社員への道が用意されていただろうが、10代で労働大学講師。理不尽に強いられた友らの死や障害を背負う運命を目撃。組合専従となって闘う生涯が選択された。来客・泊客が多く、一般的な家庭生活とはかなり異なっていたようだ。

2時間ほどお話を聞いてから手作り鍋での夕食会。

<地底の歌>

有明の海の底深く 地底にいどむ男たち

おれたちは栄えある三池炭坑労働者

公開中の三池坑のガイドさんの中に、歌える人が少ないのはまことに残念である。